

私は之を一の美術的の者に仕上げて見たい
野心を生じて、常に眼の平癒を祈つて居る。
寄語す、會員諸君及讀者諸君、若し諸君が
斯かるハメに成られた時には、大膽に御揮
毫なされては如何、諸君の御技倆では必成
功します、万一失敗しても、カラ馬に怪我
なして、ソコハ素人て遁げ道があります。

會 告

▲其後の入會者左の如し

茨城縣結城郡水海道町

贊 五木田總右衛門

茨城縣新治郡石岡町

贊 高松 康之助

京都市上京夷川通河原町西入指物町

贊 森田 平次郎

東京府下板橋町

贊 小泉 鐵太郎

▲前號西村亮三氏とあるは西松の誤

▲前號武藤、川島、岡本、石田の四氏は贊

助會員にして、西松氏は未定に候

▲賛助會員並木富太郎氏は群馬縣富岡中學

校内に轉ぜられ候



□大阪に於ける本會第二回夏期講習會は別
項記載の通り無事終了致候

□講話の大意は次號の紙上より登載の筈に
御座候

□會期中は例によつて珍談奇聞小ならず
夫等は會員諸君の投書を待つて次號より續
々掲載可致候

□澁温泉に於ても頗る神秘的な面白い材料
澤山有之候様子につきこれ又精探の上諸君
に御披露可致候

□本號の口繪は、石川氏が曾て滿洲に滞在
せられし時寫生せしものにて、原畫は八つ
切程の大きに御座候

□石版は、大橋氏が大阪講習中、住吉に於
てスケッチせられしものに候

□本月は久々にて繪葉書競技會の催有之候
課題は露(意匠)夕陽(技術)にして、九月二
十日迄に本會へ宛て御送付有之度候、但出
品の數に制限は無之候、會費返送料一人に
つき金五錢御送付ありたく、これは開き封

の中へ入るゝこと嚴禁に御座候

□暑中見舞狀を寄せられし各地の讀者諸君
に厚く御禮申上候、幹部一同最も愉快に、
尤も有益に此夏を過し候間御喜び下され度
候

評

◎雲表 小島鳥水著

京橋區木挽町 左久良書房
四六半截形クロス表裝 八十錢

山嶽といへば鳥水氏を聯想させる程、山嶽
趣味の深き小島氏の文集で、「影富士を觀る
の記」「相模野」「冬の淺間山」「日本アルプス
の南半」「中房温泉の記」「燕岳及大天井岳に
登るの記」「奥常念岳の絶巔に立つ記」「梓川
の上流」等を含む、行文の妙は今更言ふを
要せず、自然の研究に於ても他より一頭地
を抽いてゐる、「日本アルプス連嶺を觀ずの
記」をよむに、其中著者の自然觀がある、酒
々十數頁甚だ有益な文字である、敢て「み
づる」讀者の一讀をすゝむ

◎名花百種 第一輯、第二輯各四枚二十錢

◎東都花名所十二月(下)六枚三十錢
右は何れも丸山晚霞氏の筆にして發行所は
日本橋通三丁目松聲堂なり

讀者の領分

注 尾女及水彩畫に無關係のものは御斷り。
◎印は編輯者の答。投書の要點のみを掲ぐ

■多年の希望は達せられた、大阪で大下大橋兩先生にお目にかゝつた時は實に嬉しかつた、講習は中々大義で辛かつたが又忘れがたい紀念が残つた(關西畫狂兒) ■口繪は石版と三色版と交互に出されたい、それから今一枚墨繪か木版色刷を加へて欲しい(KO生) ◎第二項は讀者の數が増さなければ當分望まれません、序であるからお話しますが繪の入らない粗惡な紙に刷つた雜誌は大概定價の四分の一位ひで出来る原價がそんなに廉であつても猶雜誌では原稿料も出せぬといふ『みづゑ』の原價は定價と殆ど同じ程かゝる、其上寄送やら小賣店の割引やらで維持してゆくのかへほど困難である、誌面の改良は飽迄も勉める考へであるが、經濟上に餘地がないからあまり金のかゝる御注文は當分御勘辨を願ひます ■さぞ

又『みづゑ』で講習會の噂があるもたらが、僕は今年は殘念ながら出席出来なかつた、來年も是非關西で開いて下さい(京都玉水生) ◎奈良地方で開會する計畫もあります ■大下先生が澁の方へ來られなかつたのは殘念であつた併し我等は河合丸山兩先生の親切なる教授に満足して不平は言ひませぬ(失望生) ■會員章はよく出来ました唯々感服の外なし尙S、C、Kとは春鳥會の謂に候哉(吉田生) ■ヤー僕は四月上旬以來樺太に參つて居りまして諸君に失敬して居りましたが、今七月十五日歸りましたから相かはらず願ひます(函館港辨天通五十八、染葉、小島虎太郎)

問に答ふ

注 水彩畫に關係あるものに限る ◎の印は答一般に對して有益なものは載せず

■一 山本鼎氏は彫刻家ですか ■二 石版の製版師になるのには繪の素養がなくては不可なりや(長野・N生) ■一 畫家にして彫刻に興味を持たる人 ■二 必要なり ■農商務省地質調査處編、地質圖の販賣所は何處なりや(淺草SN) ◎知らず

長彩會

●明治三十九年九月二十四日成立 ●會場麻布區霞町十七番地金江宅 ●會員赤壁徳彦、中村正敏、河鰭達夫、岡田三郎、田中饒、金子保、小田部誠、新井正俊、金江龜 ●年四回展覽會を催ふし、毎月第一日曜日に研究會を開く以上(金江龜氏所報)

編者より

◎工藤清波氏へ 峰の松は苦心の作であらうがあまりに透明色が多過ぎて遠近の調子が少しも見えぬ、總てが固く紙面に空氣がない。夏の川も同様中景が前へ出て來て繪に深味が見えぬ ◎立花氏へ 結構な作である家の工合が箱庭の陶製のやうに見える、水鳥の位置がよくない ◎千葉氏へ 色が單調である影の色もあまり明る過ぎる、綠にエメラルドグリーンを多く用ゐぬやうにされたい ◎小林氏へ スケッチとしてはこんなこゝとでよいでせう ◎宮澤氏へ 面白い出來と拜見しました家但屋は一研究されたい